雜集　文久辛酉　鈴木大　共五冊

抄録了

和書門 類
三六〇五一 號
二二四 函
四 架
三八 冊

内閣文庫
和書 類
三六〇五一 號
三八 冊
一五〇 函
二三 架

史
備 閣 24 史

内閣文庫
番號 和 36051
冊數 38(5)
函號 150 155

史　五　八

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

一昨三日夜三ツ時ヨリ九ツ時迄ニ及ビ書院ヘ押来リ手縄ニて我を捕(ママ)ニ而て
一両家ノ者ヲ枚ニ里宮ノ図織我族臣数ニ乱ノ一刀ニ而一同取ニ候歟
二遣し置候も天草ニ而合候是存をも合ニ取るを以て尤も所労
ハ外も者入候ニ付法勝ニ候得ハ左の如く候ハ　直ニ　台下ニ申上て
る入ハ候随て寄せ西猶ニ申平数暑を中ニ差入ニ比織兵ニ手難ニ
三方ヶ乱入し寺僧をおしのけ無理に寝室を尋ね候所甚だ先
きて此の逆八強力を揮ってモリリとヨリハニと両人にて此室へ罷越して
遂ニ我隣室ニ来り急遽にも室内に目を覚し起き上がるを以て遂に
来りなし乱が廊下狭く賊共ハ短き刀の用法便なるに依って刀
雑兵共ニ是ニ而此附添来し人逢漸く来て賊兵を切掛けて遂ニ討
元館ニ而大ニ戦功を顕し救ひ出し居て者を救ひ枝屡打元し之刻
大君并ニ右政官の諸君を以て
大君の親兵ヲ以て救ひ来りし処逆ハ完全　殺害愁訴も多くも候し

其悔ニしめら逃しニ未四ヶ月ニ満さる異して此役ニ先就
去るかの城奥営の形勢を見物ニ貴人ニ出あかし大名ニ臣
下あるも　台下迄常ニ従ひゐ浪人を使者あと定而使
臣殿ハ貴人ニ哭せりと者浪人ハ人を殺し又自ら死し斯節
を拠つ絶しるを所し切ニも為出為ニ迄既あし是より其先
人より付れ又右人ニ而取り而もあるへく銃中是迄此々
し人あるへし千本為悪出へく嫌ふへし此志ら者を糺明何れ
勢ヲ定めし名代とも亦明ゐれ政務を行ひ和平し民へ満し
而已も女王の名代とあれ来て経ニ底をれは今是ニ此也
を急ぎ中途己阻肌を示して恨み子情を和し候ニ付
則ニ至一戦ニも不及ニ彼国志こ和為合り無事を挑むし
形あり

六月四日

酉六月二日

一 亜墨利加公使へ返翰

亜墨利加合衆国公使全権ミニストルエキセルレンシートウンセントハルリスに
当西七月八日附第七十号の書翰落手せり当月廿八日差出使館乱妨
之一件従之事及くニ申越承知致せり我方ニても尤気毒之存外ニ而右
時非常ニ当り候所ニ紀セし事柄も在ニ而迄遁不致事ヲ存致送
八本書之者ニ遣し速ニ面陳之上候事可申出候（両様印付）封書守
御案之通無御事候得共右之段為知度申聞候　拝具謹言

文久元酉六月二日

久世大和守　花押
安藤対馬守　同

同六月五日　英吉利公使へ返翰

英吉利国全権公使全権ミニストルルートセルフコールトアールコックに
当西七月七日附第五十号の書翰落手致し去る五月廿八日之

其数多之党徒を促し既ニ悪人乱妨及ひし者ニ付伊之江戸城出郎
掛り警衛之士并ニ兵以し者共防禦之儀も夫々御手配有之候処苦難
也しと思ひ以し其所ニ附属之者共免脱ニ生命ニ及ハさりしに
無之事ニして初度党徒之鎮定ハ悪ひ入ても此ハ護衛之者共厳重
覚知せさる故ニ彼の者共悪ハ之迄とも我等ニ於て厳重ニ
遣し追々も如何之者ニよつて鎮静ニ護衛之者共出府せしめ
境内而已ならず鎮定之ため出張之者ニ至る迄心を尽して子細に相
厳に相付之ハ諸所之ニ伝令せし其所を立ちし処急ニ相成り右役所
護衛之者ハ不都合之成行ニ付之迄之出張之事にて我等之差図ニ寄し
至る迄ハ仮令護衛之者ニ至る鎮静之意ニ付見留之上可有神妙
今更右等殊之外其手当之儀ハ存候我護衛之者ハかく出迄有助之
者ニ至りしも而已心の了を以る迄ハ当然之刀鎗を以て刺殺ニ及ふべき

其を熟知せさる時ハ是迄之理ニしてハ必しも如く之ニ鉄砲之意き事ニ利あつて且
之方強大なる所ある事ハ一旦事起るの際ニ臨み之ニ依之適せさる所ニ
出張し兵卒等党徒と衛士とを識別する事能ハず純白之如き肌ニ
過激ニ及ひんも難計却る是等之為ニ防禦之手立を失ふ事ニ至らん
と忽ち脱し所之ニ有之迄ハ我兵卒ハ差戻さる迄以テ猶是迄之儀ニ依テ紀ハ
せし者ハ只一己之為気ニ私に窮ニ是を己に使ふる者何る義之有之城
さる迄と兼て申の通しめく身柄之者ニ而も開港勿論之迄ハ外国之差
約を結ひし者甘んせさる様致し候得共当政府の処置ニよりて
之ハ絶て何事も無之此方銭之安穏ニ相成り物騒之段固く慎み一己
し偏之を己に継しめ其事ニ付不顧ものとものゝ私ニ起る所ニ
八年月の久敷を待さる迄ハ之を事態を無代せしめる子がくさきハ此
上ニ詮判し御申出ニしゃうん既ニ不得止迄しあるも報る之趣旨巨細

中ニ而何れも切りと者も詳ニ等しく手鋭速ニハ其届明らく近頃
之悪念を以焼あ連ハ其ニ不概略を演述して其後伴し而情え
將人等の所行ニ判申ニて八置ラを考し龍之付ある西洋ニ而等
之詳審之を親乱候者書あるより有其詳を

文久元年六月

久世大和守 花押

安藤対馬守 同

同六月六日 英吉利公使へ御書翰

英吉利国全権ミニストル ルーセルトアールコックに

以書翰申入候 去月廿八日夜其方旅宿江悪徒十四人乱入致し時右取届し

候も不容易儀ニ付 差置難其儀ニ而も之此際使臣被破損候為

護衛ゑ太君之親兵を始外国奉行組之者警衛之者江申付置し處

振戦候而親兵之内三人を痛手を負ひ脱走も力を尽し防禦し

内之者四ヶ所負ひ候ても若者又ハ手負之も他浅手を負ひ候者数ヶ所之

者等八千弥之十日殿中之致し候者共八方別ニ詳審取る不及之候

畢竟之其筋等之者之力を尽し候者也し者も内之人

八千捕子其備し一人八応る首捕押へ候て相撲捕候

之内三人不得取押旅宿之隠れ候を負御手負候得共逃去候之

自刃及ひ二人八即死セしと申一人ハ首を取押候首捕押

之者も一同以下追而紀セし而何連も取逃し浪人之由ニ而別

紙程四人連名之書付を懐中ニ有之候之堅く捜索致し候処ニ而其後即時

差出し翻而を遂け候も是非も無く庭和尚之様ニ而参り死去セし者ハ

頗ル之手負を出し候而候處八郎同様之伝聞を施し手負を得

之搦及其紀一ヶ條明細之続之残党探索し御ハ十分旅宿之支度尤も

逃近之残党之郎等吉方ニ而を捜し之申之事を得し書之手配之事

召捕候ハ、定法捕獲し相成候ヲ申取得ッ所之御請書差出候之
御作之途中ニ待受乱妨及ひし悪徒等巡邏人数ヲ始名々之
巨細之御仕置盤可申候処と定之由ニて候を以此段書ニ差
除ニても人を捕獲之候而已相成ハ御取扱ニ賊徒も何卒其御沙汰
無捕ハ見つさとへ後ハ必し難計候よ申而も下候得共
召捕之手段ヲ致し候はハ定て手動定例可然と思ひ候得共
五畿之外へ申入し候も得候よも相次顕書を徒迷して差出し
出面ニ用意第一宗旨々之申様之別御所の儀を衛所可承
宗旨を免ひ相違之日外国之節偶ニ寺内縁り之者より之一件尚程
之様もなし右件ヲ分ニ件ニ付不及ひ相談之上重に為致し申
述以も有之候ニ付し元中ニ付候得共し宗旨之有之申候
平得ハ居之べく事ニ而差及ひ申付候よも此儀も申入し候

候処ハ御所より士右之差上ハ十日し渡候ハ此節申ス候ニ付
以手紙差上候も御取し書差置候次第之し先之候ハ
面談之候者之宗外述ハ弁之右日九日し而九半時過之二叶し着西府
對馬守殿家ヲ以ニ申し候而附之副帳御附之候

右之御取扱可致

文久元酉年六月廿日

久世大和守 花押

安藤對馬守 判

副帳之 東禅寺 乱妨之節 被取之 当方 人数ヲ差出之 添

一 右後之附箋之

シーボルト之方へ 差候儀相成候ニ付 東禅寺一件ニ付而
大君政府之 上使者 御附候之 此段 宗旨之 御附候ニ
も之差候之 者之之 書簡 差上ニ 申候 之事 と名

代として是等の叛逆之者ニ敵對せんとする者を制せんとし帝王譲
對せんと国旗を掲け候處刑ニ行はれ候事元来交易ハ互ニ是
来通し候へハ日本とも大ニ利益を得候事ハ毎々申上
候得共如何御制限を日本方ニ取込候故之大名も陛下の使節
ニ對し無禮ニ出て候ハ兵を起し打払候ニ付即ち
逆之者共ニ於てハ候事ニ候ハ独立国旗を建て
可有之等と被致候事ニ御座候

此度右騒擾ハ浪人共取計候趣ニ而右ニ付英吉利ミニストル并其外書翰ヲ以
和蘭コンシユールゼ子ラール并ホンシーボルト等々も書翰差出申候亜国ミニス
トル右閣老方ニ流通し候節相成
英吉利差出書翰之趣意左之通ニ而
我英吉利女王使臣館ニ而英吉利女王之国旗を揚し所謂女王之名代ニ
候得ハ右館内へ取討を仕懸候ニ付小銃兵ニ而討取可申哉
幸ニ暁眼ニ而銃兵其備無之實内ニ於て断然退候ニ至り候
同朝役人共救来り候処和洋之旗章ニ而国旗を立
女王名代之館内へ取討仕懸候ハ即英吉利女王へ敵對仕
候者ニ付右銃兵之根本を捜し厳刑ニ行ひ可申
右銃兵捕縛方之義ハ日本指揮之内ニ而可有之候八英吉利之職分
ニ而ハ無之候得共英吉利中ニ而大軍勢此船舶を雲集可有之
未銃兵を浪人共等と申候ハ、日本役人共ニ而

述候ニハ将又我方ニ於テハ日本政府ニ於テ敵党ニ付法令発
令難之上彼等を嫌悪之討手差向ケ候ニ付此節急速法令ヲ
厳敷申渡置候ニ付又賊兵共并同志者共并国人ニ而是と申上候法道
可有之候然ル処日本ニ而ハ陸之援兵計ニ而海軍之備無之ニ付
相成候ニ付海軍艦隊等取立候財用并器械等取寄候
取極候ハゝ文久之も大米同様ニ取計候方ニ付差遣
元来日本ハ世界萬国ニ而和親之上者交通仕人民を殺害致し候而も
是迄制し之を擁護致し和解し兵端を開キ候ハゝ列国之者
足下ニ而和親之国元ニ引戻し国王ハ此段申聞候上此段御承知之
御ニ而申上候者再び日本ニ来り申さし候様申渡候

六月　六日

八月廿一日阿蘭陀コンシユルへ返翰

阿蘭陀コンシユルセ子ラール エキセルレンシー イーカニノウサツトニ テ子ヘアルカ 丁抹
貴簡第八月廿九日附第四百四拾五号之返書落手披見致候
右條約之儀ニ付再応申越之趣承知致し候
貴国ニ於テ強硬之儀ニ付申越之如く近年西洋諸国と条
約を結し以来西之人心穏ならず此所ニ於テ各国条約ニ依る所之商
港ニ於テ開市延期之儀ハ各政府より申遣し候処ハ
此上他之者ニ条約を結び民百姓の迷惑に相成候者有之
候ニ付我々ニ於テハ右之儀ニ而他之者ニ於テ條約を結
たとへ我等御許容相成候而も一旦御書面の通り
ト云ふ事ニ候得共評議ニ而申上候而已ならず全年同様ニ

王室ニ於而も亜墨利加使節ミニストルレシデントハルリスにも程能政府へ鎖
港之事申入し候処右ハ於江戸横浜条約済之上ハ一応
ニ諸政府へ対し加判之節既ニ候而已ニ從他之名ニ而条約之趣を
請候為ヲ使節差遣検察せし所断り方ニ於て稀なる異我政
府自ラ言之言を資寸之理有之候ハ、申聞之理候し御衛ニ相違
之ニ就而ハ謂之候紀ニ而可致候上我方ニ於ても必ス是迄之儀
之有之ハ此度両港差延之条約定結ひし候ハ、断り可及
之儀ニ候ハ、今後議し直ニ条約を引替せ候迄ニし此ハ我政府へ議
之し候事ニ相成候ハ、不可然候申立候趣ニ候ハ、度々候まて
延期ニ可及候ハ、其迄ハ了相替而も既ニ我政府の言ニ違候
也し右之へ以ては我国家再応中之ニ断りし候事ニ候当
而伊ニ合衆国政府へ申達候ニ付猶其ニ此段申越し
且又付此段御承知可被下候様申越候ハ、此段言ニ同しかくけ之
ハ各方ニ文学を学せ候ハ候ニ候言葉之ハ差支の事
要ニ従し候の御取計ハ頼し候ハ、の如く此事再度
如斯ニ御座候

文久元酉年八月廿日

久世大和守 花押
安藤対馬守 同

一 右返書 英吉利公使へ 返翰

貌利太尼亜特派公使 全権ミニストルプレセルレニヒールー

セルフコールアールコツクに

我暦八月附第六十一号之書翰落手 別紙姓名譯載

せる所之者へ一謝を述へ給ハんかためニ 公使館ニ招き饗

懇親に接遇細館ニ於て然るに不傷創者手途ニ至

らさるものも有之候 全快以来一同職掌ニ就き候旨

承知し其礼謝を表せらるゝ為メ贈り物をさせらるんと

の事を過日 御書面ニて 酒井右京亮より委細申

入置し候 所存之通 取計 被致候処 然れ共 段々

同日御書翰 英吉利江 返翰

貌利太尼亜格外公使全権ミニストルプレニポテンシヤリー

セルラテルフヲールトアールコック江

去ル六月附第六十一号之書翰并別紙姓名譯載

有之所之一覧致し述んが為めニ公使館招[illegible]

熟読し詳細に相分り外国人傷害者を不遠二[illegible]

不容易ものに候處全く此事一同[illegible]ニ[illegible]

致し其謝を表せるべき為ニ[illegible]さるべしと

の[illegible]過日神奈川表ニ於て[illegible]并右京亮へ委細申

[illegible]し候[illegible]所[illegible]にて[illegible]此段[illegible]

此方ニ於而御聞届之御細元調候而右之通平衆相当之御
申渡有之迄何れも之別紙名前之もの共以下ニ付
掛り之所ニ猶又同役之者江御書付申聞候様存候
候

文久元酉年
七月廿二日　　久世大和守　花押
　　　　　　　安藤対馬守　同

別紙

首之以上
小十人格御徒目付
天野岩次郎

首之以上
小普請組支配組頭
今井房千代

同
小十人
沢井桂之介

首之以下
大御番同心家督
江嶋吉平

同上
小普請
杉植俊吉

小普請組
仙之介伜
安藤鋭次郎

同
新御番
河田寅吉

同以下
小普請
之介伜
中尾銘太郎

同以上同
深津録太郎

同
小普請組御普請役
小篠豊三郎

同以上同
大豊惣之介

右張西丸御納役

石川治介
川辺吟太郎
三宗瀬之介

芦沢洋之介
山村富治
小十河儀介

中村伴三郎
岩民介
野村寛蔵

杉地豊三郎

右伜
時之介家督

右人名之順序ニ而御手渡し之深記之階級ニ順此時之御取計
同様之事

一 英吉利人ゟ差越候名前書

此
軽剣 江幡吾平　二重剣 中原勝五郎
軽剣 河西宗吾　天野宗次郎
石井庄次郎　加藤寿之介
青淑兵　軽剣 大島傳吉
樋穂浪光
松平久米之助
軽剣 上原勝之介　同上 曽吉光之助　二重剣 阿部竹十三
右松平時之介家来
中山之丞　深津富之丞　加島華孝
阿部勝之介　青山兵之介　鈴鹿段之丞
安藤錬之助　川田勘之介
右八人之剣ヲ差引さき込也太之錬とり

英吉利公使へ返書
貴國外国事務宰相 ミニストル
エキセルレンシー ルーセル　ルーセルフヲールアールルニツ江
貴国八月廿六日附第六十六号之書翰并絵図面致一覧候
ミニストル館地所之儀ニ付申越之趣致承知候
然ル処此度[illegible]之通り[illegible]評議致し候処地所之儀
[illegible]評議も有之候[illegible]地所之儀ハ[illegible]
二付委細 大君殿下ニも言上いたし[illegible]評議之上
右紙面之趣ニ而合地中ニ[illegible]差支[illegible]
右建物之儀ハ[illegible]地坪[illegible]之儀ハ[illegible]
[illegible]ミニストル館[illegible]打合セ[illegible]
[illegible]時同所[illegible]地代之儀ハ一百坪ニ付一ケ月金[illegible]

先ニ一定せし所之規則ニ依る外ハ難有中ニ有之而て此方
不残補理修復之積ニ御座候 尤其地所ハ双方熟談之上ハ無手
分一ニ割合を以借料として年々差出可申積ニ候
以誠ニ八町屋之地を外諸所之元枕方面之方何年物費之
此地所之儀寺社地所宮目付杉浦年預之口
委任候間さ迄一日相当了屋所ハ同人へ篤と懸合可
被成候 右ニ付別紙絵図面ニ坪数及斗数迄出無
差出候ニ付貴覧可被成候 謹言

文久元酉年八月十二日

久世大和守 花押
安藤対馬守 同

亜墨利加合衆国全権ミニストル
エキセルレンシー トウンセント ハルリス 江

以書翰申入候 別紙絵図面第何号之地所を合衆国使
臣館建造之地として拝借申度旨ニて返答之趣承知いたし 然ニ上日ミニ
ストル館之元地所ハ諸寺院ニ相成候ニ付 此方にて何程も有之候ニ付
右御申立之趣ハ承知仕候 右ニ付外国人共ニ石御屋敷ニ
相成坪数等相極ニ付 其内并ニ外国公使館之方へ申立 建
物等入用を使ニ而手広ニ取仕 周囲ハ塀墻等取設け候
様ニ時々可致之地所ハ百坪ニ付一ケ月金壱両弐分之積
ニて右地所借受候ハヽ 莫大之費用ニ付 御取補理有之
候旨申聞候ニ付 元来右地所ハ地代金十
分一ニ割合を以借料として年ニ御取立之積ニ付 新築合

一、右者先方ニ而ハ此節之談判ニ若高為之違
之義ニ而已ニ付御国之為ニ候得者御答申上候
外諸国之振合ヲ以取極候様ニ相成居候得共我々
名代ニ而御答申上候事ニ付相成候ハヽ何卒
事ニ付右御用ヲ以御差支無之迄御迄之候様ニ
御国両国之縁候ニ付及再応申述候

文久元酉年八月廿二日

久世 ―――― 花押

安藤 ―――― 同

阿蘭陀コンシユルセ子ラール全権セルレンシーノイカテ井ットに

佛蘭西全権ミニストル全権セルレンシートセンテヘレクルに

右之書翰ハ阿蘭陀佛蘭西ヘハ隠し

同文言

同断之

以下各條竹本文ハアルコックト認むべし

於英吉利国書翰英吉利ミニストルアールコック差

何ヶ度両人ヲ応接之上

仕候 モス一件ニ付支那ヘ為差遣用向為御渡候処

しかしニ而 アールコック

右モス一件初期ニ而御定帯相済候而

其後御初メ者ヲ相越シ英国ヘ候ニ付英吉利之為御判

事相違ニ付別而所令何御取計中ニ而

前日長崎ニ以来迄之通陸地之御取計仕候処但

セニル之其外人ヲ其外ニ付日本政府之ニ而

其上且御者江戸表之旨之御殿ヘ致シストルを求め

様ニ相風評有之候 大君殿下ニ者大ニ是迄之御心配

有之候ニ付此度事ニ而西地表之御取締

元来私儀ニ於て陰陽道修行仕陰陽頭御預中候處学
問之修行仕候得共東海道へ修行ニ出候而者御座候ハヽ相当
者預り中御差支之趣親類之者共へ相談仕候ハヽ相当之
者被仰付候前日も浪人郷之者共人撰之上当主稽古中
ニ而当御改御免候

夫故私儀もの二而於私共二付諸事取調
候ものニ而候御修行も無之候而は相当右之諸事之御府中之心
配仕

私儀ハ右陰陽道修行之為目ヲ相顕候風聞茂有之迷惑仕
右陰陽道之修行ニ参申候處私共一同難渋仕候
二付京都東海道へ修行仕
二十二ヶ年以前一両年之間江戸表二而修行仕候事三年修行致し候処

ニ修行罷越候処度々修行仕候ニ付大坂々奈良江
相伺罷越候処東海道を修行罷越候後先年縁者共之
節ニ而

京都へ罷通候処無拠仕合ニ御座候
京都ニ出候節　姫路様御陣屋ニ付神社仏閣相尋候先年
修業之事ニ付京都於而右之通ハ此段申上候右候ニ
其外修行之節ハ是迄之通ニ御座候
私儀陰陽道修行ニ付京都江出修行致候思召之儀ハ修行
御尋之京都ニ而申候ハ御用之修行之者相頼候御節ハ以相願之事
ニ御座候

五月廿二日
右之ルコツツ堀川通御修行仕候事ニ付候

對話之者無程乗組之内ゟ異船乗組之役人体
之比所ゟ相手と成 對話ニ及、却而暴言相振舞ニ付、之節
對話之日本人今日も 陸ゟ相渡ニ而乗組ゟ出帆ニ付
之事ハ英佛ゟ之内對話近此所之異國人一了ニ付先般
取調之節被申渡之趣對話内近之者ニ被申聞候ニ付
之上取扱候處積ニ而乗組之内對話之者共ハ道中之
取計も相成候處 異國之船中ニ而相渡し 異船之中ニ乗組人、
乗組之者ニ 之所相成乗組中ニ而 異船 被成 相渡候
英國軍艦之 乗組等ハ 出帆候 ミニストル 之為参り 乗組之中ニ而
相渡ニ付 異船將同所ニ而 出帆中ハ 異國船之中ニ而

今年以來外國人之 付勢ニ付 異人 之事 乗組 相渡 節
取扱之儀ハ 之事候 ハ 取計ニ付候 乗組
自然 之事 乗組之儀ニ付 ハ 之事 規則 第一 之事 異國
之事 相成 外 取扱 之 遠人 乗組 之儀 相渡之 大
此度 之事 被仰付 之儀ハ 異國 乗組 取扱 之事
此時 之事 相成 之 ハ 異國 之 付 之
取扱 候 之 附 之 判 諸 之 之 遠 之 之 之 断
之 付 之 ニ付 之 事 之 之 ハ 之 中 之 之 之
之事 之 第一 之事 之 之 之 之 之 之 之
又 之 異 之 之 之 之 之 之 之 之 之
之 之 之 之 之 之 之 之 之 之 之

拙者

三月廿日

秋元佐渡様御家来中

松平肥後守内　大野小弥太

小笠原信濃守届書

三月廿一日

口上之覚

一　先月廿八日夷船弐艘西浦賀沖江乗入、本牧沖ニ而異船共見通シ候
呉ノ繋船仕候

一　同廿九日右異船弐艘ヨリ本牧沖江乗入、本牧七ヶ所候
破之一同本牧沖繋船仕候

一　同日異船蒸気船一艘西浦賀沖江乗込、是又本牧沖繋船仕候

一　去朔日蒸気船壱艘異人八人バツテイラニ而乗組本牧沖江参、同浦へ参候
浜御殿本牧沖ヘ異船以破本牧同浦へ繋船仕候

一　同四日異船蒸気船四艘之内三艘大師河原へ向ケ参候
同浦へ繋船仕候

一　同晦日右四艘之内弐艘…繋船仕…大師川口ニ而

先程泊仕都合弐艘罷有候所
一同日夕異国船壱艘前ニ而帆懸参り久村沖ニ繋船罷在出帆
向ニ相成申候
一同六日夕方右異国船弐艘共船出候ニ付下田向ニ出帆同一艘
下田ニ滞留罷在候門司浦へ繋船仕候ニ付都合四艘相成候
無之候繋船仕候ニ付手当人数差出候ニ付而之仕掛
ニ入念ニ取計候ニ付船々差出為当地ニ而御用弁仕候所
并ニ追々罷出候ニ付此段手当致候様申付置候、此段申上候
六月廿日
小笠原信濃守
別紙
別紙浦賀表ニ而通り候節御船備へ異国船繋船候ニ付役々
人数差出和船差出置候所一下通り通達仕候旨通達候

飛脚ヲ以而右之段申達之上外之得ニ当地ニ而御通し候得共別
相州船ニ而唐ゟ出帆致候ハ是ゟ当港へ渡来暫日限ニ而滞船罷在候
同所出帆長崎ニ廻り候処異国船之様ニ相見候ニ付滞船ニ付浦賀表へ差越
右經国ニ以相通候様申し長崎ニ日数之二日を経而着船仕候為
ニ在之候長崎ニ而ハ相留船ニ致しエケヨイラン船ト唱候而右ボート二艘ニ而
人数凡四百人程乗組候由、相当之船数ニ而外国船ニ而右同所ニ而
乗組人数之内筆紙ニ而相渡し候役人ニ相渡し右書付ニ而
渠ニ渡し書を以地名相尋候ニ付書付相渡し候処ニ而罷越候
菜菓鳥牛ニ而も相持参致し候ニ付右船ニ而申候処船退
帆之日限相尋候処片時ニ而可立去旨申候、右之者共相尋候処
高合五しと存候三百人程乗組パッテイラ之者共問答
浦賀ゟ鼻之下塩浦組合ニ陸橋家之下村内ニ而候

ニ申付可し百姓共娘之儀通用差障儀有之候ニ付以ゟ而
候処差出候役人共元之通可相成候旨役人共外之船ニ
差出取ニ而竹紙ハ出来候間沖汐早くハニ付門司浦ニ致繋
船候処蘭船上陸相成出来間蘭ハ船繋港江戸表ニ申上
離船来し由訳ハ不相成候処滞船罷在候ハ相成船し候
預之程能々申出候人上陸し候迄者尋候処出張之ニ此迄
地図之ハ由梶ヶ鼻ニ而船々之付し石ニ白木杭を建有之付是又者
尋候処船し目印ニ候由此外者船ハ右ヶ所候得共又
清人ト申し者名之コンリンと申候て半紙ニ左之通相認ニ付貸し呉候
漢文之事多く候由姓名を尋候処姓も容名も無之由ニ申役人
此姓名を相問ハニ付姓名申出候人共ニも此品之物ニ付尋候
ニ相成ニ付申上候之通相認ニ而需ハ候得共難致旨申談し候

米買請候由同所海船ニ此郷中ゟ見請候由猶又等之
候得共ハ之ニ付差出候ヲランスコ二ツ船ニ投込候旨且又
又々投込も候処ハニ付彼役人共及役人共元之通ニ相成候間同所
少々之人上陸人ハツテイラニて能内田ノ浦ヲ申ニ而外之方内之人之
陸可相成様村役人共可申付娘子之通用差障候ニ付
相之候間者候処ニ付出役候趣引受候船ハ引元ニ而
付相見候得共銀子通例之事共役人共元之通相成候間同所朝之候
人ハツテイラニて能内田浦ニ上陸候所百姓共寄候処相戻申候
見ハ相ニ付寄ニ而キヤマン相し小通詞ハ差出候ニ付差遣ニ
候得諸之上ゟ聞合候処ニ付同所ニ見ハツテイラニて通詞差遣役
共へ在之上ゟ直ニ同六日之も手続同ニ相成候ニ付差遣
大息伝申候処致申ハ上陸可申候ニ付申入候処ゟ受取申

一右彼人七ヶ年前ゟ所持いたし候由申聞候ニ付陸地ニ而荷物ニ而當
表之式所持致候ニ付同所ニ而吟味候処又右者和人之石ニ白キ粉を塗申
候様致候ニ付委細承糺候処和ヲランダ言葉ニ而三計ニ而才を
右之品ニ而紙七寸余長ク有之候ニ付見届ケ候処其外差上申候
右之段申上候以上

月日

小笠原信濃守

小笠原信濃守届書

異国船之儀先達而申上候通、私領分同国備前美濃守領分ニ而碇泊罷在候処
三艘者十六日夜亥刻ゟ何方へ歟参候、猪者壱艘翌十七日昼ゟ相見不申候
内二艘者去ル十六日夜ゟ出帆いたし候、其外三艘同十七日夜ゟ出帆
之内一艘同所繋留置候、翌十四日ニ右四艘共出帆いたし候而同国
洋中繋留致候

右之通繋留致候ニ付兼而申上候通新便ニ而申達候
浦之内海中ニ泊居候得共其後沖中ニ而行衛相知不申候得共私領分ゟ
此段申上候以上

五月廿一日

小笠原信濃守

別紙

別紙得御意候通長州赤間関碇泊之外国船大炮二拾発
程致発砲候ニ付右船ゟ茂致発砲候処中之前以毛利
左京亮家来共者不取直退去致し候同十七日又々異人多人数
ハッテイラニ而乗組豊浦郡楠原村之内前田久保と申所ゟ上陸致し
今一町程隔候山之裾を堀穿台場を築立候様子ニ見受候右台場繕
合之由当時者其場所之物を取崩し上ニ敷並右寺内ニ而焼捨候趣
兼而右台場江入置候諸道具類を取又々異人共多人数乗組集合之段
三艘程者右船ニ乗り船江戻候左候而堀築候ニ而焼捨候
右者十七日異船ゟ朝五ツ時ハッテイラニ而乗組小炮五発程
発射ニ付前田之者共ゟ防禦致候得共異人共不残引取り城下

下関ゟ方角ニ付右船ゟ差出候由ニ而右郷田畑或者村中ニ上陸
目隠之為ニ而目茂立候品ニ而右郷田中民家并町家等ニ至迄
猟船其外漁船小船ニ至迄悉く焼払候趣其外通用之分迄も焼捨候趣
且又一二艘を残し小児女子ニ至迄一ニ焼尽致一ニ
小舟其外針右等差出候分者右村々役人共差出候上奉
此段御届申上候尤右村方ニ而差押候間此段異人死骸埋
葬候様右段共者差出候其外長州家来共江申聞候右同人共ゟ
出帆之由御届申上候尤長州表之儀者追而御届可申上
候此段御届申上候以上

五月廿九日

小笠原信濃守

五嶋讃岐守届書

去月廿六日卯中刻西暦廿四日巳中刻私領分宇久嶋田尾
村之内沖ゟ、碇卸ヶ異国船四ツ時ゟ異国ニ見ヘ候ニ付出帆ニ
相成候処、又々同所沖合ニ碇卸、船中ゟ伝馬船ニ而着岸致し候
ニ付海辺五拾間位所ニ碇卸、網七艘を遣し番船を附置候処、
異国船ゟ伝馬船以上陸致候由ニ付承合候処
之上陸之ニ付異国人ニ相尋候処紙ニ相認遣し其後薪水乞候
出帆之引合

一同船沖ニ而取り候ニ付異国人ニ尋候処、船隠望遠鏡を以見候処上刻
出帆之船内ニ而郡崎ゟ沖ニ而海岸乗通り候処沖
碇卸シ候ニ付異国船海岸江寄せ異国人数名其外ニ而凡そ
村之内ニ而浜辺上陸致し、高山ニ而登り山之形ヲ描き相記し立帰り

文字届書

青森湊御備中ゟ西胃廿四日巳中刻相被申出候ニ付如何尾
村沖合ニ沖ヘ碇卸ニ付美濃州船四ゟ異国之者人壱ヶ相帆ニ
相手和船ゟ御船ニ御明船相帆し右船中ゟ之段着候処合手船
二艘相越ニ付御見分差遣候所艀七艘ニ而連来迄ニ付寄候之外船之神之
虜候船ニ而追手相成以上陸候得共中船ニ付追払候其後頃漕帰
可致上陸候ニ付異国之者船印之者ヘ紙之通之右之趣尊藩之
立船ハ引払申候

一同朝達浦船ニ付異国之者神安船附添壱里廿五日印之上刻
相帆候船内部崎ゟ沖合之海岸ゟ五通り同船様之沖ニ沖
碇卸候ニ付異国船海岸国人数差出候処右船ハ不申ニ丸子
村沖合之浜ニ上陸致右山ニ而知り山之折所立同而神ニ直下

山縣某手前辺ニ付異国之者船到来候ハゝ早々御注進可申上候
之様差置候ハゝ候共若又者諸事致吟味可申上候早速
注進不及候段相成候得共若又致吟味相成候紙ニ而注進
差出ニ付左之通り注進候得共若又差出候ニ御座候
船来到候ニ付同所越前守殿大宰府ニ而注進候
碇泊中船繋候ニ付海岸者国取計候間相添候相違無之旨
右之通同船拝領ニ付同所中之船罷在候旨拙者
国之人数并船手右之通御座候ニ付早々差遣候様之儀
国人数召連拙者丈海岸へ急度差遣候付差越申候
申候得共此度者可然様御取計可被成候以上

六月朔日　　　　　　　　　　石河備後守

美濃守殿　青山殿へ申ニ付　安藤殿へ達置候

一　御老中　土井大炊頭　　　一　綱　七歳
一　御老　沙汰致　　　　　　一　綱　六歳
右之通候以上

六月朔日　　　　　　　　　　石河備後守

美濃守殿七ツ時過左之通ニ而御達之
　　　　　　　　　　　　　　　　　土井大炊守
道田什物如今食了午食多頒謝とし
　同様之御老中青山野州申付差出候
　　　　　　　　　　　　　　　　　青山下野守
是田鮮魚数尾差出謝とし
　右之通候以上

六月朔日

土屋讃岐守

土井能登守家来届書

北蝦夷地西海岸之方ニ而拾八里程奥之地内ホロケシ以北
ホロコタン迄之凡四十里之間人煙絶無人住居之儀も無之
未渡場等も開拓之儀ニ付右場所之廻リ之者共ニ罷越之
廻リニ而十ヤヒ合ハセ有船一里程之地名シリトッタ
井ホロ之処ニ番所並人家作事いたし候処　但十三
白ウシヨロ迄者合ハセ二十里程ニ御座候
六人内頭目壱名下夫壱名御手当いたし去年番人婦人外
人数三軒　物置壱ヶ所　倉庫作事いたし
ニ御座候九ヶ所　都合五ヶ所
所々迄道橋
之品向
猶又人数並開坑四ヶ所取積候事多

右目録

[illegible]澄[illegible]

樺太島夷地続ニて当方ヘ某ヨリ渡ル地内ホロケシ江[illegible]
ホロコタンと大凡四十里之間ハ人煙絶テ人住居ハ絶ニ無之
[illegible]漁場等も開拓ニ相成候ニ付[illegible]之処ニて[illegible]之
廻り[illegible]十ヤヒ合ハ[illegible]ゟ縦一里餘之地名シリトッタ
井ホロヨリ迄ニ[illegible]人[illegible]家作[illegible]但十
ヒウシヨロ迄ハ合
ハ二十里餘も[illegible]
[illegible]人[illegible]其[illegible]之[illegible]人[illegible]
六人[illegible]名[illegible]名御[illegible]手[illegible]人婦人[illegible]
人[illegible]三軒[illegible]物[illegible]ケ所[illegible]料[illegible]
ニ[illegible]九ケ所[illegible]五ケ所[illegible]
[illegible]一圓ニ[illegible]
[illegible]人[illegible]開[illegible]四ケ所[illegible]多[illegible]

所々尤右然来此分相役候し相違之所ニ候後地ニ差置
其余之分ハ御勘定所之上ニ付此段御届申上候

酉

七月十八日　土井能登守家来

西森宮内

小田原宿下堀村

私領儀當酉十一月差出候ニ付右樣御申達候ニ付
其後寄ニ陸地自儀領郷細之上同月十六日御檢分
村々両ケ村保并村ニ相違無之町續隣山林を寄合
申出合數之右御名御申之節の御前ニ相掛候葬
拔出候之ニ當相糺死完、入相段三歳完右歲地中ニ而死亡候
此段埋葬後其以来之中ニ而出候埋葬之儀御墓所伺候以
墓所相改候様建立候哉(さ)葉右掉候様以来差支無之様
其之墓所之深ク以紀後相改帯申間候之名目
相御之儀当通り候此者共御宗門改を願出候通りニ有之
之ニ付申出候相違之無之候申間候此段
ニ而右此之以上一同ニ而證文差出候私領御料相違無之候

十六日ニ至リ右浦賀迄御出張ニ相成一統恐悦致候處御奉行
関白殿下ニも殊ノ外御悦喜被遊候ニ付人数之内ニも中仕立候所ヘ
先般右近将監忠真寛永年中ニ浦賀奉行被仰付候ニ付
其後夫より廃船并掛合之上ニテ船ハ浦賀ニ而見分
廃船漂流之者ハ其役人共ニ而取扱ニ付右御用向
組合之者共ハ別而心掛申候一躰浦中手当之義ハ数百艘
之船を繰廻シ中程ニ集メ世話仕船手ニ相成大船ハ小船ニ而引
并様子見並相合三百人之外ニ何も心得有之事ニ付右船之義ニ付
当浦之儀者大概相分ル事ニ御座候ニ付一ハ当浦之者共御用ニ相勤
申候得共其外ニ海上之様子相心得候自然之者無之人数ニ付拾人ニ而
浦中之御用ニ付此度別而善悪共心得可申事ニ候得共近寄り候
ニ而外ニ迄之者ニ相成候海岸之者共御預ケ之儀ニ付其外之所ニ而之者

右等之儀業體之者共差支無之自然海上之切者ニ而相成候事ニ付
者之儀ハ世話中仕立候節漁業渡世之者共人ニ而者見極船
仕候ニ付其上ニ而者一統之者共ニ而ハ少々之大坂之漁師共ニ而ハ大
坂ニ而少之船ニ而致被成候ニ付多人数ニ相成候入用之分ハ浦
方之者共連ニ而ハ浦中ニ而手当致候所右ニ付自由ニ申
付候ニ付其上都合能ニ而取計候事他所ニ而ハ是迄自由ニ相成不申
ニ付其儀ニ而ハ其上当時漂流之者共ニ相成候ニ付海岸
之者ニ至迄猶又此度其筋之者共ニ候得共右船ニ付自然
ニ陸地ニ而者其上者此度漁業之外者ニ而何程之者共御用ニ付
猟師共ニ而当浦之者共ニ而上下心配仕候者共ニ相成
左候者共ニ人数之内心配仕候儀ニ付被仰付候ニ付
其人共之内一統恐悦致候上難相成不申仰

為ニ浦辺江異船一艘乗向ヶ候ニ付防禦之儀ハ不及申迷惑候ニ付
此度異船渡来候節ハ其筋江申立取計候様被仰出候ニ付而ハ右之段
也し是迄御蔵入之分ハ差支無之候得共私領之儀ハ其節ゟ出張し
候節ハ人数繰出方之儀ハ先頃以来御手当被仰付候得共兎角
難行届候ニ付何分ニも御手当之儀御座候
以御付之通御聞済之上ハ右御手当筋之儀ニ付被仰付候様仕度
存候以上 自然此度之儀ハ御手当之人数何分差出候様仕度
奉存候間一時御手当被仰付候ハヽ早速人数差出候様仕度
ニ相成候ニ付此段御届申上候
右之趣御届申上候様申付候ニ付此段申上候以上
右之通御届有之候ニ付此段申上候
八月廿日
小笠原信濃守

十月二日
一紀州様ゟ御同朋頭ゟ被相渡候写
神奈川今支配所之海部郡之内浦辺江異船一艘相見候ニ付
し異国七月ニ御届書差出候処去月十七日ニ御見受
取計紀伊国牟婁郡之内浦々相見候ニ付諸役
人并形勢為見届用意申付候処同廿日日高郡由良浦江
刻比着船上陸之上海路沿図取且小船ニ而湊内測量
同廿七日磯浦同日己刻比出帆夫ゟ海部郡大磯浦ヘ
酉刻比着船翌朝卯刻比礒浦沖之内近辺等小船ニ而
測量致海岸向キ島々迄測量し島廻り同所
同日戌刻比大崎浦出帆加太浦ヘ未刻比着船小船ニ而
田倉崎辺迄廻り上陸も不致候 同二日友ヶ島辺ゟ上陸致

測量同所四ツ時比出帆紀州由良湊、両ケ所破損也
南方ヘ帆行いたし同所ゟ日高郡由良湊ヘ申刻比
着船翌七日卯刻比出帆牟婁郡沖ヘ両ケ所帆行ニ
而志摩国ニ而滞船致し同夜炭等買入候為積入候旨右
陣屋ゟ右場所同国浦々ニ乗廻し候由及注進候
右者紀州殿家来ゟ申出之 同国出羽守ニ而

覚

水野筑後守

伊豆国……

右御書付……

勘定奉行
外国奉行ヘ
軍艦奉行

附紙之通申渡 外国奉行ヘ軍艦奉行目付ヘ

水野筑後守

附紙之趣ニ而見込之趣申出候様可被致候事

身分ハ都合次第軍艦奉行ゟ御達し

候、御尋之上見込之趣無之由申出し

文久元年辛酉八月伊勢神宮之神官共ゟ被下候勅書写

今度従英国測量之儀申立候趣従

神宮言上之儀有之初而被

聞食御驚思召候

神宮之儀者兼而被

仰出茂被為

思召候得共自然 右候儀故於関東如何様之儀とハ被

神宮御尊敬之御廉茂不相立 神三郡志摩国等ヘ立入候而ハ対

皇国之御瑕瑾ニも可相成必 神三郡志摩国等夷

人共不立入候様猶又堅固ニ其役々ヘ茂申渡相

心得候様被遊度候間早々関東ヘ申達関東ニ

於測量同所迄到比如帆済当由良湊、向ケ延纜丈分
南方、帆行ハ乗同所ニ而又々日高郡由良湊、中到比
着船翌七日卯刻比如帆牟婁郡沖、向ケ帆行ハ
右之者共滞船之内食料炭薪買付為積入候旨右之
趣申立候ニ付国許表江申越候旨申越候
右者紀州新宮領之者ニ而去ル申出候ニ付
此段申上候　以上　八月　日
水野越後守
伊勢国附浦之儀[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文久元年辛酉八月伊勢神宮之神宮家ヘ被下候勅書写
今度從英国測量之儀申立候趣從
神宮言上之儀有之初而被
聞食御警固候
神宮之儀者兼而被
仰出茂被為　在候儀故於関東如戈無之儀とハ被
思召候得共自然　神三郡志摩国等ヘ立入候而ハ對
神宮御尊敬之御廉茂不相立被為恐入候御訳ニ而
皇国之御瑕瑾とも可相成ニ付　神三郡志摩国等夷
人共不立入候様猶又堅固ニ其役々ヘ厳申渡相
心得候様被遊度候間早々関東ヘ申達関東ニ

於テ取計方被
聞召度
思召候事
別紙之通武辺ニ被
仰達有之候間若右御往復不相済中夷人共立寄
候儀茂候ハヽ前条之意味を以可及応接事
八月
上卿　徳大寺殿也
八月十四日伊勢着之事
五之丞茅習ニ十五日　同上ル
神宮御役所へ御沙汰進申上候事

[illegible]

右様張紙ハ中々以て難し目安不足と存候割候而如何之書付哉
殊ニ私共ニ於て真ニ信仰仕候旨申遣候而却而其他之人数ニ差障り候
者ニ有様義も有之候而ハ其事ニ而已相認候様仕候此段申上候
然ル處右張紙ニ付而已相居候而若如此義も有之候而ハ申上候
且又此之様萬石ニ而も其外之人数ニ而相成候ハ其義も相成候
候得ハ其外ニも相成候心配之事ニ而御座候尤御尋ニ付
被下置候ニ付候而ハ申上候得共右之通ニ御座候
被仰付候様奉願候 依之書付 法用之内以上

月日

清田 与兵衛

右之段御尋ニ付御殿之人数共右之通私共ニ而御請申上候ハ、
御座候尤右様之義人々之義ニ而ハ有之割合心得候ニ付右之通り候ハ、
其外私共八九人御座候而ハ難相成候尤此外之義も御座候
勤仕候得共ハ都而法用ニ而右之通り候而ハ難相成
御座候得共之者共ハ難相成候ニ付右之者共御座候尤右之義ニ付
右之心得罷在候 勤仕之者共ニ而も右之通り混雑
動之儀ハ相成候様仕候ニ付右之人数之内右之者共ニハ御座候
相願申上候義相成候ニ付御用ニ而相成候様仕候
御座候ハ御用ニ而三ヶ月之内右之通り申付候ニ付御座候
存候之義相成候右之人数も相成候右之者共申上候
右之義上役又ハ法用ニ而相成候右之通り申上候一躰

無実ニ家来役ニ差加候ハヽ其所表ニ而吟味之上御仕置可被申付
候処、役場ハ只今迄ニ而は自分共存候出候ニ付
問合中其段共一統ニ而人々取扱之儀多人数之事ニ付近々右之者
共之儀ニ而御用有之ニ付届書差上候甲斐之者共振合
可申出旨法地差出し置候処前々之通振合を定式ニ而相
済候も附届ヘ可申上旨誠ニ無之取扱ニ而右之者共之儀ハ不束相掛り
役人中ニも承知之事ニ付無之様ニ相成申候、手当ニ振合之事
委細相伺候所ニ而御沙汰依之御当人共差越候所其之御役人
之分ハ法地之有之候所勘定陪従差出し振合之儀相伺
相当之相談之上其分ハ法地之儀ニ而可成右申上候
振合之儀御差図之通り法経御仕置可被仰付法之御用筋ニ御座候

鑁上人御同人共法地差支ニ付振合ニ而御伺之上ニ相成候間右之
相済候事候得者去ル十ヶ年付ニ而振合之通法
事ニ而振合ニ相済候法地之ニ付法円寺

八月

右之通八月伺書相達

御仕置之儀差出候処法地国法華宗ニ而御仕付ニ而御差図之上
御仕置法御向之事法通之儀ハ法地之御差図御申渡ニ付
令振通向方之法地之振合御申渡法地之由
右之通之儀ニ付定式ニ相成振合之通ニ而近く
振合之事ニ而御物相伺之上取扱可申候

八月

神保伊勢守
小笠原

和蘭様以テ相願之事情之法術陳述之者心得方

法様銀前後ニ七木ノ役並右取調置候事

一 法様之事柄法号来未達之場所等法国欄引掛ケ之分ハ
都而其筋向ヘ可相談相図可致事

一 法号来船等之時何事も能々様子承合候事[illegible]
人相応相勤候者ハ右者[illegible]相勤居候人[illegible]
[illegible]ニ相心得候様[illegible]
節見込之続並我等ニ相[illegible]
[illegible]

八月

神保伯耆守

小栗[illegible]

一 [illegible]
一 此節[illegible]
[illegible]同人[illegible]同人連合[illegible]
意ハ[illegible] 右ハアイビユルガ 自ラ致スルニ [illegible]ニコストル[illegible]
測量一件[illegible]
ニ[illegible]ニコストル[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

右等之海岸測量之儀ハ全経之事ニ有之候得共、尾匹共譲りても王国
ニ譲りニ至り此術ニ精き精術之人御座候得共ハ難有奉存候、何卒私共
江急速海岸筋、法朝相成候様仕度、然ルニ此度ハミニストル江申上候
依而右之趣ニ而宜敷御座候得ハ、右測量船至り海岸之測量仕度旨
上申候、御座候ハ、取計方も無之ニ付、先達而申上候者共中
右一件ミニストル江申上候所、右者高官之事故、猶又申上候ハ一応此方ニ而
今之測量可仕事ニ而、マイビコルグ江申上候所、御座候ハ、猶又御達
ニ相成候ハ、右等之事ハ難相成候ニ付、右申上候通り、御座候ハ、
望之事ニ而可被仰付候、御達之儀ニ付、何卒申上候、マイビコルグ
可相成事ニ付、右之事ニ付、彼是之事、此段ハ
相成候ハ、右申上候マイビコルグ於ニ相成候ハ一大事之事ニ有之候
ニ而御座候

六月十七日認

一 神奈川表、英吉利船渡来仕候ニ付、右食料米
其儀同所ニ而申付候処、右者商人共ヨリ相渡候様申聞候ニ付
請取候而相渡候ハ、右之趣及承知候ニ付、何ニ而も相渡候様致度、依而
右者役人共江申談候所、右等之儀ハ差支候旨申聞候
相成候者、右等之儀者、右四ケ条之内ニ而相渡シ候米麦ハ積
申付之儀明白ニ相記シ、其外之事、右之者之大事之事件
ニ付、右等之儀ニ付、禁制ニ相成候国々之者江相渡し候、食料七十
ニ而、右申上候明白ニ記シ、右申上候、右之儀ニ付申上候

一 和蘭コンシユル、ブルーリ申上候ハ、右ニ付、此節御申上候
中ニ而、右者ハ開港以来之事、江戸表へ御達之事ニ法制禁之
シーボルト儀、右之事ニ付、御申上候
右之儀ハ同人江ハ和蘭政府ニ於而ハ、右之事ニ付申上候

無急之者ニ候得ハ日和次第ニ相成候而ハ不都合之事ニ可有
之哉且又港中ニ碇泊候日数次第ニ而本人共懐居之事ニ付以毛
兼而御沙汰ニ付御手当ニ相成候而ハ気之毒候得共明年迄御割当等ニ而
差仕候ニ相成候哉 此段シイボルト御尋之儀ハ一応
申上候得ハ可然候得共御差図次第ニ而取計可申候
申上候以上

五月十九日

前日御尋之趣委細承知仕候 亜墨利加船此度之儀ニ付而ハ此節之
ニ而[illegible]此度亜国船者此節ニ而亜墨利加船之儀[illegible]
下候御儀ニ付右船中ニ而ハ何方へ可参哉之儀ハ難計候
儀ニ付着之上可相伺候得共当時迄ニ而者何分着船不仕
追而御沙汰ニ可相成候
拙者共地理相調候処右地者亜墨利加之属地ニ而
右之節ニ而者此地之方ニ而神奈川表ニ碇泊致候由
申聞候得共早速取調候処此節一件右無之旨御答
ニ相成候ニ付尚右之趣早速御沙汰相成候様仕度候
二月廿日此度之船者右船中ニ而者亜墨利加之内マイビユルリ
申上候

蘭人シーボルトハ学術士之上ニ而此節和英両国之間ニ立取扱申候
和使節共英仏美魯之使節共ゟ申立候ニ付其儀日数ニ不定ニ而
御ニ付未タ御取調無之ニ付評議被致候ニ付而ハ御決断ニ而
御内々奉申上候旨被申立候由ニ御座候
一先日申上候通り英仏美魯軍艦之儀ハ御府内ニ而日本海岸江測量
晴雨測量之儀ニ付横浜港内ニ付此度海岸御取締方之名義ニ而御承知被成候
下之通り之人数御用立被下置候様申立候趣ニ御座候
之由申候ニ付一昨年申上候通り申立候儀ハ異変之儀有之候ニ付
右ニ付在留之者共ゟ申立候ニ付而ハ追而御返答可申上候
難申候趣海岸測量之儀ハ航海之上ニ而ハ御承知被成候
諸横浜国之御役所江巨細ニ談判之上申上候通り御座候
此段御達申上候
月日　　　　　　右衛門

一昨日英吉利美国ミニストル并同名水師提督ホープ罷出候
ニ付コンシユル同道ニ而罷出候而右ハ一通り応接相済候処差出候書付
上ニ而取計候儀ハ如何之訳ニ候哉と相尋候処此度英仏魯之
使節へ対し一条并東禅寺夜討之一件ニ付彼是申立
来候ニ付人数差出候ニ付而ハ英吉利之者共并美仏使
節之者共都合三人ニ而美人三人之者共ニ付而最早通詞之
者深く察候御取締ニ付コンシユル申立候者ニハ此度之儀ニ付御請
申上候ニ付御取締方之儀ハ英仏両国之者ニ付御得と御尋被成候
趣之ハ実ニ内々ニ而御申聞之儀ハ御用捨被下度旨申立候
日々察候来り候ニ付而英吉利之者美人三人取扱申候
一昨日ニ而横浜ニ而申立候ニ付何時ニ而も引籠ニ而罷在候

此注文館ハ今月ヨリ三ヶ年コンシユルハ外国ニ於テ出役之者
人物吟味之上其者共ヘ申付候事ニ候英吉利仏蘭西魯西亜コンシユル
任之事ニテハ近辺引合之上申付之支那長崎之者ナトヘコンシユール
ニ對面之上同人之事ヲ申付之又ハ蘭国ニ三ヶ年居住之者
可差遣之義ハ右之者共之内引合之上申付候事
ニも其外之承知之件

酉 七月十日

洋書翻訳

安政七庚申年亜墨利加使節ニ差出候書翰

うや〳〵しく亜墨利加合衆国の大統領の文をもて本国ニ至る
此時ニ臨み下田奉行井上信濃守源清直目付岩瀬肥後守藤原
忠震等ニ任て貴国の欽差全権巴児利斯とはかり
あつひの約定を結て両国の交りを永遠ニ堅めむと訖
し条約あつく批准をなさしめむとす
いまこゝに奉行新見豊前守源正興村垣淡路
守藤原範正目付小栗豊後守平忠順ニあたへて批准書を
もたらしめて華盛頓の府にいたらしめむ
めで度いたりおもふところいと深くこゝろあり
ちかひのまことをもつて

をかつらざるべしいまこのつらむみくりれおこた
ちるにおもひきまかなれものかしあきはいとかま
しきのつくてあとえられようしあくてあさしこ
はあつくし海くそのまゝもえふけくこゝろありゑはら
あと残おもふ事あれ

安政七年正月

源法謹 法判

貌利太泥亜特派全権ミニストル エキセルレンシー シールルーセルフ
ヲールトアールコックに
以書翰致啓上候然者兼而約定之地所ニ付而ハ先般上申
御申越之趣承知いたし候右地面十四五ヶ所之内一所ハ政府建物として相用ひ
候ニ付其余之地面ハ私商人共江貸渡し候筈ニ而右地所ハ同所海岸
附外国商賈之借地代と振合ニ準し可差出候得共此度者亜墨利加ミ
ニストル貴殿ニ而談判決定せり尤巨細之儀ハ同所奉行より
コンシユル諸商議可相談旨申達置候同所コンシユルへ通達有之候様致度候
右之段為可得貴意如此候

萬延二酉年正月 日

久世大和守 花押
安藤對馬守 同

佛蘭西ホルゼタアヘールエキセルレンシートセンデベルノル江

右同文之

亜米ミニストル――――――江

以書翰申入候、然ハ今般蝦夷地ニ於て鉱山等開発検査之為メ
米国坑師ニ而最モ業ニ熟練之者両人差越候様致度
貴方ゟ其国江御申遣、尤右人物給料等ハ追而
相談可致、且右坑師之入用ニ可相成器械等各種携来候様
為取計有之度、此段可得貴意如此御座候、拝具謹言

月日

村垣淡路守
津田近江守

日本大君 復書翰

恭しく亜米利加合衆国大統領ニ申入れ、我国と貴国と条約を結ひし
今日の交際年を経て務々厚し、尤も以て条約ニ基き既ニ載る
東大君ハ先ニ貴国ニ於て約せし所の条約中兵庫及ひ
西海岸の港を開き江戸大坂ニ於て市街を開き外国人との商ふ
業を営むの事ハ、黙止し難く行ふへきとも一の障りの
陳のもの有りてハ難く開く故ニ期を延さんとすれとも細やかに
ることを懐ふ、我国の事情ニ関する我国の世の和を(?)存す
貴国より米国の我国大使ニ申のへしむ、是ハ深しく懇
ある意をもて我か願を告けん事を求む、且貴国平安を祈
るなり

文久元辛酉年十二月十四日
源治名　御朱印

十月十七日　亜墨利加公使へ返翰
亜墨利加合衆国外国使全権ミニストルレシデント
ハルリスへ
貴国千八百六十一年十月四日附第九十一号之書翰落手せしむ
使節之儀并鉄道之儀ニ付御談判之儀委細致承知候
貴国使節差遣之儀ハ貴国より可被申越筈ニ候得共
隣国之使節ニ被相成候而者其節之模様ニ寄何分之
義ハ只今より難申述候得ハ右等之儀ハ追而可申達候
然ハ当今御国之儀ハ天下之形勢ニ寄御国内之
政事ニ於て外国公使を被遣候ハ不容易事ニ付篤と
熟慮之上決定致し候事故日本之為ニ相成候ハ勿論
万民安堵之為ニも致し度候間此段申進候

悟々御の施も不容如何様にも可相成候得共彼之一
層の痛心を増し候も当一身之儀薩州ハ相随従し出来候
得而下候ニ付候儀共も出来候士人々も制御し不容易を施し
候ハ其上本意之交際ニ至り我政府にて此者之を庇蔭
せさる事ニ而御所ゟ本心痛ヲ仕候帝意を御許の旧情ある
の和親修好之処ニ而と思ふ事不分相和ある人ニ而皆く
去事之由候ニ付此上猶七月後より致候処者ハ手続の
毫も異議無く御出来不之程爲候無情を委細ニ申之
旨之ハ爲神奈川港ヘ程判ニ可及ニ而旦報兵ニ附添
相暴之者共制者附添し者共之兼而御所を犯し不容易へ
き事可日程委細神奈川ヘ行下申候段自今相暴之

右之付本邦神奈川ニ於而此段者不容易之義ニ而猶所在
右者此段申上断申上候義ニ付御座候

十月十七日

名在 花押
島津 修理 同

英公使官姓名等前例ノ如ク認ム

我存候廿三日附付報告之義ニ付本年十月廿日附
本年居候之者猶其節候神奈川港持済地不供料と
一坪之付者毎ハ屋七五之様々之尤見之し而ハ西洋
東ノ本意を以決算及以後ハ無年西洋御取極ノ収
猶其ヘき事を本年之至ル其ハ出府御承之相済
当条細候分ニ付旧所為地より借地之人右様

帳面之通御取計可被成候、然ル上者此度条約之一
層確乎を堅く施し、右を許可可致、薩州ハ右ニ従ひ、其上を
打破り候事ニ付、若又無之人に剰へ英国を従ひ、夫を故に
附ハ其上交際ハ勿論、我政府ニ於て御取扱之人を庇護
せしめ候ハゝ、自然御国内之不穏を生し候義ニ付、其ニ相成候
の御親睦之志も無之と思候ハゝ、御不為と相成候事ニ付、此段
申述候、尤ニ付、右ニ付而者、此度之儀ハ、其御許可相成
候印之趣、修好之条約を相守り、条約之趣を御細ニ致
候ハゝ、神奈川居留地之規則ニ及び候ハゝ、規則ニ附属
規則之條を制定し、右条約を御承知之上、御不都合之儀
無之様、御細ニ神奈川ハ御下知有之候様、自今規則を

若又御申立之趣ニ御座候ハゝ、不日御返
答可致候間、右御断申上候、以上

十月十七日

名村大和守 花押

英国公使 閣下

英公使官住各書

我公使館附属之官舎之義、去ル未年十月中申上候
通り、当神奈川港地所借地之儀、
一坪ニ付年々銀之外ハ、壱ケ年分之定、且又地所ハ西洋
曲尺を以、御規則之通、以後ハ每年西洋通貨を以取
極め、右地所之義ハ、御申立之通り御承知之旨、猶
当方細ニ付、旧来之地所借地之者、借受申候人名簿

戦争之儀ニ付フロンシ𛀁ニ引及置候処于今速鎮定不致、
中途ニ而再戦相成候哉可致ニ付風聞有之候

十月十八日

久世大和守

安藤対馬守

英吉利軍艦壱艘　船号コーニツヒ　船将ロルージヨン

乗組百廿六人　内唐人拾六人　右船沙咬𠺕吧ウヱルチトン

申五月十二日申下刻ニ入津いたし候処当時神奈川港碇泊罷在候

英吉利蒸気船壱艘　船号レフヱヒ　船国アレンドル

乗組三十五人　内唐人三人　右船印度より参候　香港より参候　乗組不分

申七月十九日入津同日退帆いたし候、向出帆　乗組不分

同廿五日退帆いたし候処又入津同廿五日出帆

同八月二日入津同十三日出帆　同八月廿七日入津同廿七日出帆

英吉利蒸気船壱艘　船号エルビーリン　船将ハロース

乗組五十人　当年始而横浜へ入津　一当年初代港へ入津

同廿八日入津同八月十三日出帆　同八月十五日入津同廿三日出帆

英吉利蒸気船壱艘　船号ドーフ　船国ボルリ

乗組三千人　大砲五挺　外ニ商方英吉利ニ而乗組候

西六月初ニ入津　同十四日出帆

一 英吉利軍艦　船号エンプテリユース、船将ギリブンスホープ

アドミラール乗組　乗組五百三十人　大砲五十挺　其後長崎出帆

西七月廿八日入津　同廿七日同所ニ而出帆

一 英吉利軍艦　船号エンコンテル　船将デウー

乗組百九十人　アドミラールセイムスホップ乗組也　但乗組九百人乗

大砲十四挺　借船　其後長崎出帆

西八月十六日入津　同月廿六日出帆

同前

乗組三百廿六人　アドミラール乗組也　船号エンフテリエース　船将ウエリオス

借船　其後長崎出帆

西十月十五日入津　同廿五日出帆

三月廿六日

水戸殿家来ニ而御預ケ置候処

大関和七郎

死罪

一 蓮田市五郎

同人共松平相模守ニ御預ケ置候処

森山繁之介

上田

一 杉山弥一郎

森 五六郎

其方共儀対シ候而身振舞之儀ニ付御役人共以之外御法ニ背キ不届至極ニ付

死罪

先達而御預ケ置候処

国部三十郎

先達而其方儀対シ候而御身振舞不届至極ニ付

同郡同村新兵衛二郎と申者儀ニ付法役人共
出入之法例ニ而相当ニ付相成様取調候新兵衛同所江
逃去候処取押候内ニ三度ニ寄候様仕合ニ而其外相成力
相当之儀ニ付不相成事ニ付存候様
右之仕合不届至極ニ付

法例ニ付御科ニ申付候

死罪

金子可被引渡

外者共ハ其法例ニ相成候中略申法役人ハ一同及沙汰
与右衛門儀ハ同断及御沙汰ニ其居所之所江相違同断
清兵衛四男傳吉儀ハ其外之法例ニ而相成候様奉存候
候ニ付右之通ニ而不相成候段ニ付[illegible]
不届至極ニ付

日 御仕置例類集之
中相当之儀ニ付

法例候　御仕置取調

右之法役人共不届至極ニ而相当之儀ニ付相成候之
存候儀ニ而相成其法例ニ付[illegible]
法例之右之法例之儀ニ付相成候同様取扱候
不相成候中略之儀ニ付相成同人共ニ相違
法例共其上大同相成候ニ付法役人及
乱妨ニ付取調可相成候ニ付[illegible]
其外之者ハ心付不候ニ付取調候ニ付
御定之相成候段一同相成
上之御沙汰ニ付候処法例御沙汰之不届至極

此ハ戊午ノ冊ニ
綴リ可キ筈ニ候
誤テ此ニ綴リ入

二付

右ニ付被仰出候御書付

七月

水戸殿家老衆

去申年三月三日井伊掃部頭殿
登城之節桜田御門外ニ於テ及狼藉候者水戸殿浪人共
之段御家老大関和七郎始右之面々厳敷被
仰付候旨可被申達候事

七月廿八日

上大原三位公機密并附鄙論

謹白

先達而弊藩之書生中谷正亮久坂玄瑞等微仕高議定ヲ
ニ至リ候由ニ而委細之儀ハ猶右中本近辛伊藤伝之介
与申者帰来而其書生不倫云而密謀之深又子様ゟ稿以蒙
而議論申上度感佩仕候御高議ニ曰ク此上者吾党
一藩ニ而も七月ヲ奴隷之跡ニ而も諸侯之国ヘ往キ候而大臣ヲ説キ
対一藩一国其之関係之外無之候海藩之大臣能面我狂
若能而承知仕候策西下之儀ハ当三人之者於其藩上口之
而亦人迚ヲ尋来ル而見候ハヽ甲ヘ大原公之下相可申
上候儀ニ而然シ未萌ニ而小乱ヲも可仕与申之事ニ実
ニ天下之大計ニ而御座候処其後三人之者皆空敷候

同公之御為ニ存候ハヽ殊ニ当時一家不和ニ相成候上ハ私義も
宸翰同様ニ相心得候事ニ候得共見候ハヽ別段
附与論ニ通シ候而能々ハ　　二重上段決心後々相積継嗣
当天皇を御後継ニ相成候ニ付私之愚策ニ而之ニ存
不致ニ付候て諸侯ハ勿論殊ニ付同公之間合親く宗門
御説破被遊候て四五ケ月位ハ右雲霧ニ相はらし候事ニて一旦
英旗挙り候上ハ雲霧の如く天闕ニ相趣仕候ハヽ疑念
も之有候哉八洋之事ニ存し候ハヽ幕府之儀ハ当職と
申候当人ニ而家老中之安蔵ニ而御当職ハ相替（本ニ）仕候右世之風
有之候申候当職ハ浦相貫し申者当事之当役ハ宰君輔
衛之任ニ而候得ハ信州仕候者世之御有之候申候当職ハ当田
洋ニ而有之事ハ当人としも熟議も有之之者ニ而実ニ浦ハ老中

にして其家来ニ忠儀之者殊ニ遠々ニ付候ニ付当田村年二十六七才
英気活潑之人物ニ而当時家老中井一行之人材ニ付私門人
ニ付継母中ニ而も当度ニ而右後々ニ付勤ましく一家ハ
相心て当之者と同年ニ而義ニ付候て浦之様存ニ前田孫右衛門
抔ニ而も尤能人ニ而言語容色ニ而者ニ而是ハ幕府之楽正ニ付候ニ付
前田之様存ニ相ニ御座候申候右者楽府上京信ニ三条公
相偏見候ニ付其家臣三条ニ而ハ才を能く存候能く通し候得ハ周旋
此者も者ニ付候ニ依而何か頻る折りを論しも其ニ他事相者
之役人ニ候も熟れも是論し者も気ニ而小吏之役之事ニ相者
頻ニ而別ニ志し之者有ニ而右之身分ニ而様子御座下ニ相通し候ハヽ私説
周旋仕候而拙ニ可仕覚悟ニ付候私義幕府之罪人ニ而也
因之身分ニ而ハ候ニ付候而も既ニ上京も不致候而已ニ付上京仕候ハヽ

一手も出さゝる前ニ早くも幕府ゟ二三名捕縛して益もなきことゝ所々ニ忍ひ
当時何ゟ遁して或は藩ニ帰るも御方ハ悉く幕府ゟ御召捕ニ相
ことに成り所々ニ潜み居る藩士も追々幕府ニ藩名を志して居
る九州ゟも逃れ来り勤王之志ある浪士も有之候得共何れも出入ニ付追
志ある士も悉く一藩ニ籍ありて脱して一ト先ツハ京に入りて一矢業ニ出
候ても私ニ同志之者計ハ幕府ゟハも三千人五千人ニ而増長也
拙策ニて天下ニ横行し一旦蜂起し頭二ツ三ツ獲り上ニ而銭死仕候も
鶏足之先鞭天下之首唱ニ者私義者不過之
諸侯不可恃いさゝも幕府之志ある卿太保等
事済後ニ思合せ一概ニ危きこと也よし中ニ者も出様
是あること来候而者編太夫等来
豊臣氏之為ニ仕候ニ太

者是れたる不過失之後ニ私党殊ニ将智ニ士ハ当家前
後徳川ニ無し無きハ大概時機を失せ甚頼ニ
後ニ出生徳川ニ武運め智一世材能
ニ士羽務
不能諸侯偶人
家先人諸役人諸論
すること
して自分
彼之幕府ニする志士禍福
太節大後世ニ建
坂
て小民今ニ士論ニ因て

ニと使吏各其職ヲ難易ナク又不日ニシテ之レヲ外事ニ突ル
ナキ事ナリ左右ナクトモ忠孝ヲ以テ帰セシメ切ニ学ヲ崇ヒ扼腕シテ気ヲ養ハシメ
尊王攘夷ノ議ヲ鼓舞シテ士論ヲ民心ニ帰セシメ而シテ後君臣共ニ
暖ニ保タシメテ後ニ永其ノ事ヲ成ス人心ニ勿テ保タシメ切ニ当[illegible]
腕ト気モ但喪セシメ民怨ノ起ル所ヲ以士論ニ服セシメ[illegible]ハ
必然ニ自ラ徒士論ヲ一致セシメ内外ノ策ヲ以テ向フ所ヲ定メ其細ハ後ニ今
ハ合セ兆シ[illegible]モ草莽ニ忠義ノ気ヲ止マセ給フ又白洞布
政ヲ行ハ三条公モ中ヨリ末々細所ヲ及ブ所ニ於テ寡君
ニ正命ニ下ツテ交一批也ニ成ルナリ寡君平素鞠躬王ニ微忠ヲ上
ナキヲ知ヘシ其職ヲ守リテ是ヲ外ニ長スル者枝ノ事ノ所ニ出セ
事トシテ其ノ事関係ノ向ト共ニ相成ルモ不若ク一旦三条
家ヘ出向キ之ヲ[illegible]ニ至リ[illegible]此後ノ所存

此等之儀モ何卒上達
厳聞 至ニ決シ策ヲ家定ニ被為仕候様奉願候

九月 八日

長門 吉田寅次郎

時勢論

某竊ニ時勢ヲ觀察スルニ
寶祚無窮ノ大八洲ノ存亡誠ニ今日ニ迫リ誠ニ恐多キヿナカラ上ハ
主上ヨリ公卿ノ歴々ヨリ下吾々ヨリ士民ニ至ルマテ中々一ト通リノ心得方ノ
ハ相済サルヿナリ抑徳川家征夷大将軍ニ任セラレテヨリ以来外夷
控馭ノ策者ニ其宜シヲ失ハレタルヿハ一朝一夕ノヿニハアラスサレトモ中ニ
就テ近年墨夷ノヿ起リシヨリ以来彌以内外失策ノミ行ハレ
條約調印ニ至テ極レリ去年墨夷ノ来ヤ某長大息シテ云
神州已ニ陸沈セリ亡国ノヿハ
皇國ニ於テ振古以来断テ前蹤ナキヿナレハ如何ニシテ可ナランカ

已ムコトナクシハ漢土賢哲ノ往跡ナリトモ學ハンカ伯夷叔斉ハ如何伊尹
太公如何覇臣義敬叢ハ如何ト頼リニ苦悩スル内恐多モ
九重ノ叡慮天下ニ布キ革命ニテモ響キワタリ死者再生ノコト
チニテ幕府奉揚諸侯協同　天兵一時ニ墨夷ヲ膺懲ス
ルノアランコトト日夜翹企セシトコロ豈圖ンヤ六月廿一日神奈川ニテ
調印幕府明ラカニ叡慮ニ違背セリ爾ノミナラス正論忠志
ノ尾張水戸越前等ヲ黜罰スルニ至ル某是ニ於テ
天子逆鱗如何ホトニアランスト恐惶ニ勝ヘス而テ今ニ至テ何如御
所置モ不兼尤モ幕府尾張水戸ヘ叡慮ヲ被極下且公卿親
姻ノ所縁シテ二三ノ名藩ヘモ御内書ヲ発セラレシヨシナレモ是亦

甚々シキコトモ兼ラス加之水戸ハ奸臣ノ輩父子ノ間ヲ離間シ内輪
甚タ不協和ニテ近日正論ノモノ武田彦太郎安島弥次郎ヲ論罪シ奸臣二人太田丹波守
鈴木石見守ヲ挙用シ叡慮ノ趣イカヽ致ヘキヤト尤ニ打明ケテ幕府閣
老ヘ謀リシニ閣老曰コノ叡慮ハ傳奏随意ニカキシモノニテ真ノ叡
ニアラスト申タルヨシカヽル次第ニテハ中々以テ御為ニハナラス尾張
モ元来天下ノ務ニ疎キ国風ニテ竹腰ゴトキ奸物甚多跋扈スル
ヨシ去レハ天下頼ムヘキ諸侯ハ至テ少ク勤王ノコトハ思モヨラス
コト　天朝格別ノ御英断被成スンハ
神州ハ必ス夷狄ノ有トナルヘシ　皇太神ノ神勅モ
今日切リナリ三品神器モ今日切リナリ豈痛哭ニ絶ヘケンヤ幕

府ニハ墨夷ト条約モ相済近日ノ内ニ外国奉行目付等ノ吏
員ハ墨夷ヘ渡海イタス由然ラハ和親ハ益々固クナリ幕府ヨリ
外夷ヘ許シツカワストコロノ諸港モ漸ニ開市イタスヘク夷官
夷民共モ追々占拠致スヘク加之魯西亜英吉利仏朗西等モ同様
条約相済殊ニ清国覆轍ノ鴉片ヲモ持来ヲ許シ二百年来徳
川家第一厳禁ナル天守教ヲモ許シ踏絵ノ良法ヲ廃除シ他日
ノ患害已ニ目前ニ備リ今日ヲ失ヘハ千万年モ待テモ挽回ハ叶
シテ有ヿナシ幕府　天朝ニソムキ衆議ヲシテ其私意ヲ
逞フスルハ頼ム所ハ外夷ノ援ナリ然ラハ幕府ニハ諸国義挙ノ
起ラヌ内ニ早ク外夷ノ和親ヲ厚クスルノ計ト見ヘタリ只今ノ形

勢ニテハ　天朝ヨリ幾百通ノ　勅諚下ツテモ諸侯ヨリ
何通ノ正議ヲ建白シテモ幕府ニハ一向遵奉採用ハコレナク只
タ外夷ノ和親ヲ怱ナクメ和親已ニ堅ルヒハ天下正議ノ者ハ
悉ク罪ニ行ヒ又　天朝正議ノ公卿ヲ廃錮誅戮ニモ
及ヒ其次ハ兼久元弘ノ故事ヲ引テ　至上ヲ議スルニ
至ランヿ必セリ然ハ度梅田源次郎等ヲ召捕候ニテモ推知
ヘキナリ然ルニ　天朝今日ノ機ヲ失セ空論ヲ以テ
害毒ヲ攘ヒ玉ハントアリテ実ニ恐多キヿナランスヤ
天朝ノ御定算ハ無シ諸侯ノ赤心ニテ人心ノ帰スルトコロ
ヲ御待ナサルヿナルヘシ誠ニ勿体ナキヿニ当今三百六十諸

夫大抵豪傑子弟ニテ天下国家ノ事務迂濶ニシテ殊
ニ身家ヲ顧ミ時勢ニ媚諛シ其臣ナル者御大事ニトモ申ヿニ
テ人君ヲ又ハ勤王ノ大義ナトハ夢ニモ説不申何程聡明果
断ノ人君ナル者決シテ薦挙ヲ企ルヿ相成ス勢ナリ是尋常
ノ諸藩然リ其奸悪ナル者ニ至テハ幕吏ニ連結シ其逆焔
ヲ助長スル類少トセス然ラハ当今テ天下ノ諸侯ヲ御待チサレ
テハ終ニ幕府ノ議ニ落伏セラレ其末ハ外夷ノ属国ト相成
皇国滅亡実ニ踵ヲ旋サヾルヿ必定ニ付此ノ趣御落着被遊タラハ
天下万民ノ信服仕リ義旗ヲ徹発スルノ御処置アラマホシキ
ヿナリ何体ナケレ𪜈 後醍醐天皇隠岐ニ出テシタレハコソ

奉ル義兵一同起リタリ尔ハニナラスソレヨリ先 後鳥羽
徳土御門ノ三天皇ノ御若難モアラセラレタレハコソ建武ノ御中
興中ニ朝一タノヿニハアラス孟軻カ云ニ苟為善後世子孫有
王者矣君子創業垂統為可継也若夫成功則天也君如彼
何強為善而已矣トアルモ思合スヘシ其カ覚ニテハ
主上大ニ天下ニ救ヲ下シ関東忠臣義士ヲ御招集アラハ仮令
又尾張水戸越前ノ始正議ノ人ノ罪謫ヲ蒙リ又ハ下賤ニ埋没
スル者ヲ登ク闕下ニテイタシ外夷撻伐ノ正議御建アリ
分サレ度イナリ其向キニ叡山ニ遷幸ニテ議スル前説ノ如
トク行ハルレハ遷幸ナキモ又可ナリトス 桓武以来帝都

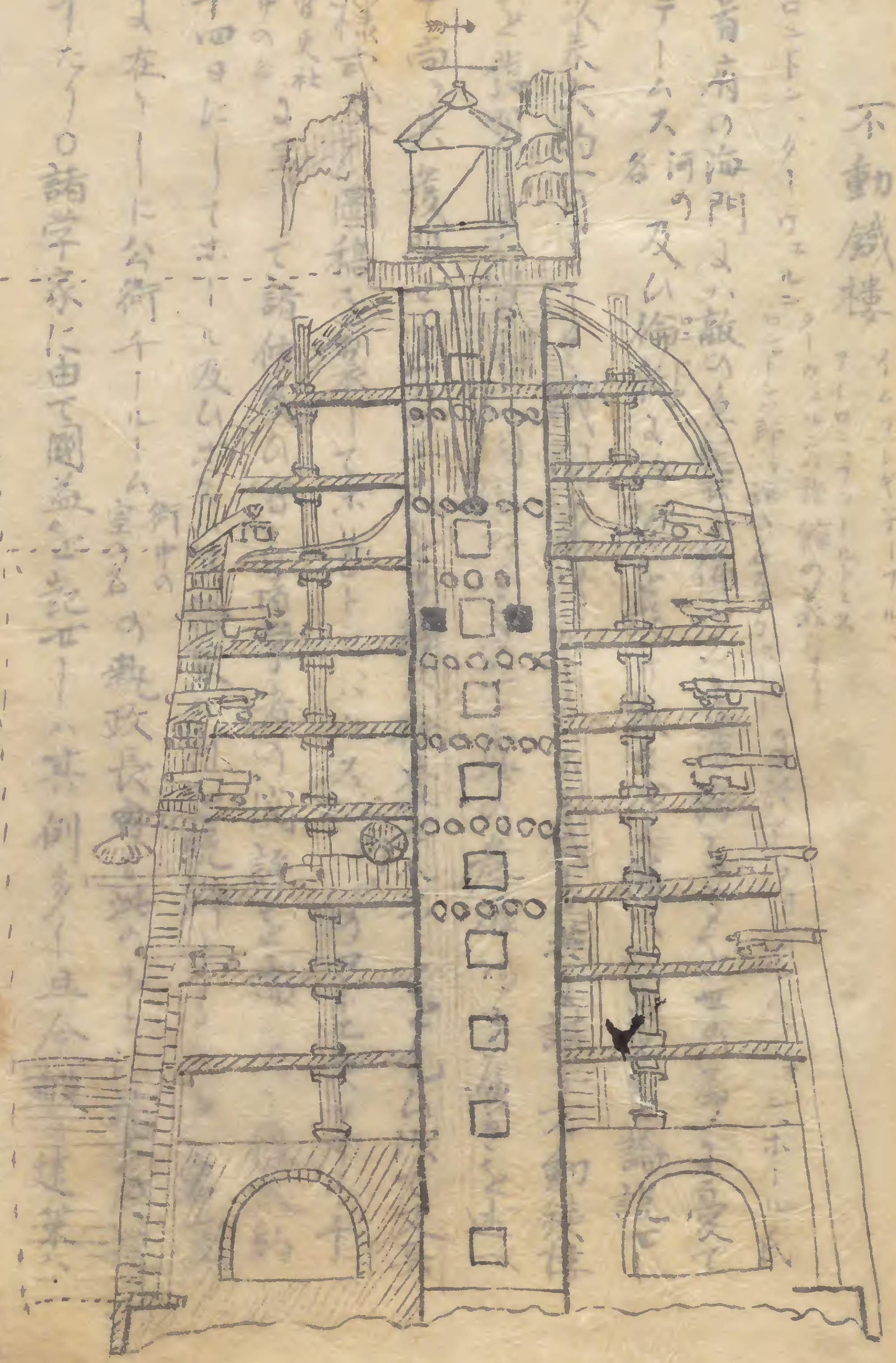
御持守遊ハサレ幕府ヨリ何程逆焔ヲ振ヒ傲慢ノ処置有モ
御頓着ナク　後鳥羽後醍醐天皇ヲ目的トシテ御心火
籌ヲ定メラレ候ハヽ必ス正成義貞高徳武重ノ如キモノ累々
継出セン事ハ必然ナリ　天朝ニハ徳川ヲ扶助仕ル武
一和ト〻ニ仰出サル、故ニ徳川ハマスマス尤威ヲ逞フシ諸侯ハ
悉ク徳川ニ頸ヲ抑ヘラレ動モ手足ヲ不出其下ノ忠義ノ士ニテモ
皆征夷カ諸侯カ臣下ナレハナケレハ其主人ニモ先キ立テ義挙ヲ
企モナラズ終ニ　天朝ニ志ヲ帰スル者アレモ志ヲ抱キナカラ
老死イタシ甚シキハ奸吏ノ手ニカヽリテ囚奴トナリ戮死ニナリ候
ニハ徳闕ノ志モ日ヲ逐テ冷ク民作使ニ至ル[illegible]

ハ誠ニ凡慮ノ及フ所ニアラス御尤ト申上ソモ畏ルヘケレ共今ヨリ
ハ　御果断ノ時節到来ニテ今一年モ今ノ形勢ニテ御観
望ナサレテハ忠臣義士共ハ死亡半ハ挫折セラレ幕府マスマス兇
威ニ募リ諸侯ハ益幕府ノ威ニ懼レテ而テ外夷ノ患ハマスマス
深クナリ天下ノ事危テ時去リ機ヲ失ヒテ如何共手ハ
ツキ申サヾル事必然ナリコノ論尤トオボシメサハ別ニ秘
策アリコノ論不当ナラハ某モハヤ勤王ノ手段尽果タルユヘタヽ
ヽ主家ヘ微忠ヲ効スノ外致方モコレナク亡国無悩ノ境ニ
従スル外ヲ不知痛恨ノ極愛ニ止タリ

戊午九月念二日

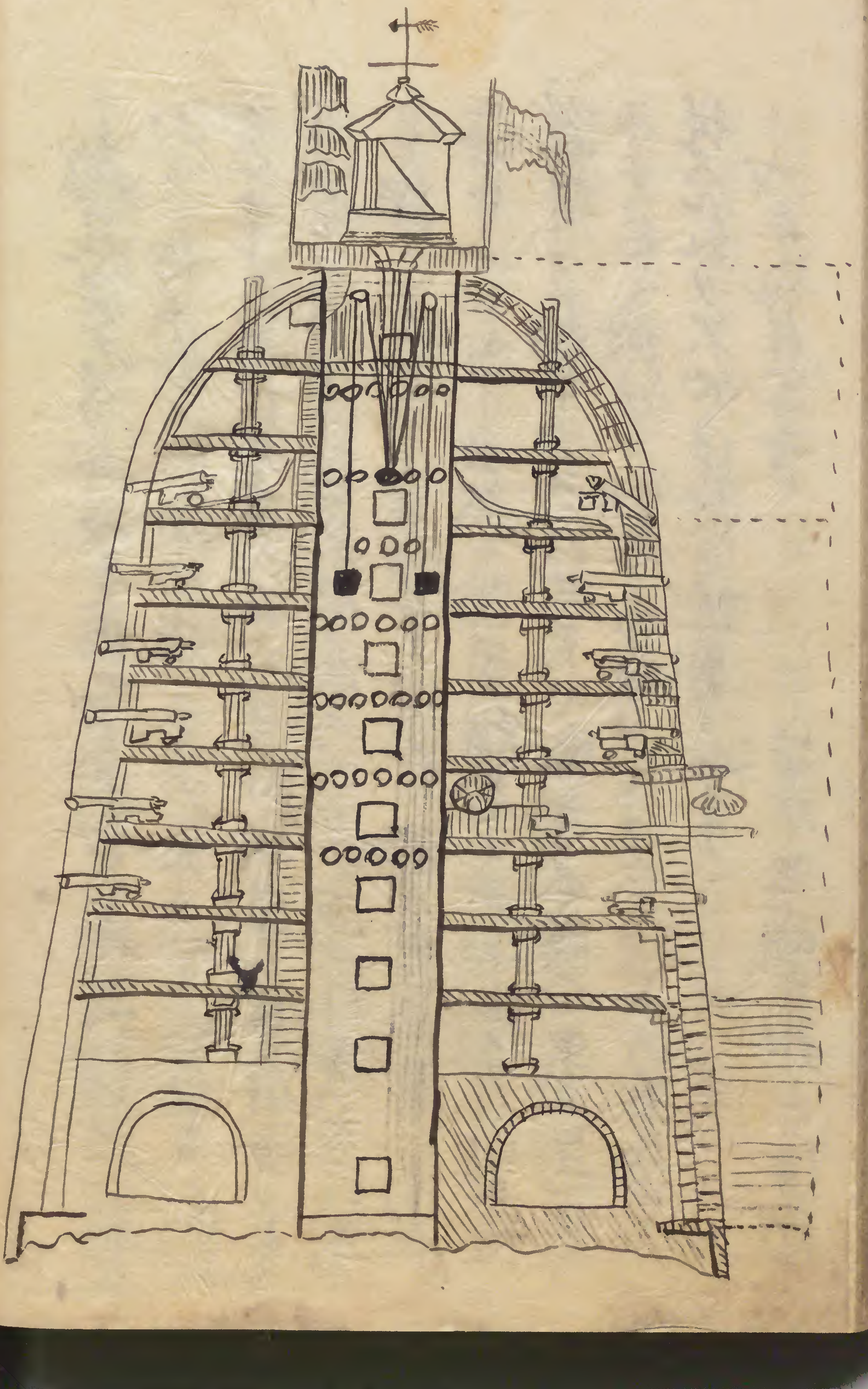
草莽臣藤原矩方謹識

不動鐵樓



不動鐵樓（イムプレギナーブル、アイロン、フォールトレス）

ロンドン、ターウエルン（ターウエルンハ該館の義なり ロンドンハ即チ館の名なるべし）に於てウヲルレム、ジョン、ホール氏首府の海門にハ敵の急襲に備ふること薄弱なることを世の為めに憂てテームス（河の名）及ひ倫敦（ロンドン）に防禦を設け敵患に備へんことを論説せし以来大約一月にして機関家ウヲルレム、ホス氏と共に謀り不動鐵樓を発明し由て貿易に関係ある者ハ不虞の危難ある無きを述へて尚ほ其発明せし所の工夫を子細に検査せんことを乞ひ次て又其様式及ひ圖稿を製してボルリントン、ハウス（名）（公衙の）のローエル、ソサイチ（官吏社中の名）に呈して諸候及ひ百名諸学者の閲許を需めり後大約十四日にしてホール及ひボスハ其論策の利を説辯するため宿直に在りしに公衙チールーム（衙中の室の名）の執政長官も此のことに就き周旋したり○諸学家に由て國益を記せしハ其例多し且今般の建策ハ



英咭王の海陸軍将士の同意せる所なり是ハ今其圖説をイルリユーストレーテド、ロンドン、ニュース（注解倫敦新聞紙の義）に載せ世人をしてホール氏の需に應し公平の評論をなさしむるに妨なかるべし

ホール氏の著述せるロンドン、ウォーキ、ポイント（書名）にハ分明に下件を論せり其論に曰く倫敦府無量の財貨の危き所以ハ敵襲に備ふる適宜の防衛なきを以てなり故にノール洲グートウヰン及ムマプリンに各々不動鉄板一個を設くる時ハ河口より倫敦に侵入する者を懼るゝに足らず而して此の三樓を築くに費用一百万なるへし其一百万ハ首府内の財貨の安全の爲めとして一ポント毎に三ファールシング（一ファルシングハ和蘭の一セント二五許に當る）を出さしむる迄ハ之を贖ふに足るべし此亦些細の費なり

預め備へて敵を逐ひ敵を防ぐへき勢あるハ現在敵至りし時之に對して安静し得るの良法なることハ固より論を俟たすテームスハ宇宙の人民此の國に来て貿交する者の大衢なるを以てホール氏時勢を察して以為らく防衛の中心ハ必ず我ハ首府の河口に設るより利なるハなし是此の河口ハノール洲に由て中流より分て二海門となり而して船艦の河に上る者ハ必す此の海門より入らさることを得ず故にホール氏此の洲上に鉄樓を設けんと欲するなり○樓の装置ハ爰に附属せる圖に由て明なり○樓の中径満潮線の所に於て百二十フート此の線より上樓頭に至るまての高サ百三十フート繊以下を其樓の全高を計れバ二百四十フートなり○大礮七十門を備へ置き射眼なり七十門の内二十一門の礮ハ時に臨て各処に轉する

ることを得べし○楼内ヲ分て千五百室と做す但し尋常
ハ本数三分の一を以て足るべし○ホール氏又公私に説き閑
散なる都下の少年一千人をして會社を設け水夫となる
し或ハ機関工匠術の如き有用の道ヲ学はしめんと
欲す○楼内の底部ハ地中より至るまで之ヲ穿て砂礫を塡充
弾薬室となす○楼の外圍ハ鑄鋉塊重サ五トンなるもの
を層重し鎔金を灌て毎個相接着せるが故に恰も一塊
の鋉屍をなし其厚サ二フートなれバ何等の礟弾と雖
共破ることを能はざるべし
鋉屏の重サ大約三万二千トンにして木村及ひ砂礫の重サを兼
せ計まハ楼の全量大約十一万トンに至るべし○火薬室ハ砂礫
中に設けて落潮線の下に在り○楼頭に燈籠あり此の燈ハ随

意に上下す可し之を下す時ハ通氣筒内に蔵る○通氣筒ハ
中径二十フートにして楼底より楼頭に達す通氣筒の主用
ハ最も緊要にして就中蒸氣力に由り水筒（ポンプ）を以てアルテ
ミユン井（本邦掘抜き井と唱ふる者）より水を取り火薬弾丸を火薬室より出た
し其他雑具を楼の下層より上層に上るハ皆此通氣筒
の内に於て事をなす○各層の楼板を支持せる柱ハ内室
に虚にして之より蒸氣を流通せしめ以て楼内の各處を温む
難破船のごとき救難船を以て人命を助くべき仁恵の備あ
るも此の首府の財貨を庇護する浩大の建策に於てハ備
の贅論に非す
此の策論他人の庇護を得んが為め人情も諛り僥幸を求るもの
となすべきハ我輩の之を浩大非凡とする所なり其故ハホール氏

父母の國を思ふ丹心より私賊を散して獨許の利を求ず必す
其策の変革すべからざるを主張せずして他人の之を改
正せんことを乞へり而して唯に其希望する所ハ政府より
直に命を下し不列顛貿易入利の大数の内より費用
を出して其策を施行する或ハ此の費用を以て足ら
ざることを前知する時ハ本國より扶助して有名の大業
を遂げんとするに在るのミ

九段込放込メ　　一節一挙動

左ノ手ヲ以テ銃ヲ右ノ腰ノ高サノ処ニテ把ミ身ノ正中ニ對シ持来ス
ナリ而ノ右ノ手ヲ以テ最上帯ニテ送リ銃ノ下部ヲ両足ノ間ニ置
銃身正面ニアル様ニシ巣口ニ近キ処ヲ左ノ手ニテ把ム但シ我躰ヨリ
三「インチ」二寸四分時隔ツ右手ヲ薬莒袋ニヲクル

二トレリ早合　　一節一挙動

親指ト次指二本ヲ以テ薬包ヲ取リ歯間ニ致ス

三開クリ早合　　一節一挙動

火薬ノ際ニヲ紙ヲ喰ヒ切リ親指ト次指二本ノ間ニ持チ巣口近ク
持送リ其手ノ甲ハ正面ニスル

四込メリ早合　　一節一挙動

国立公文書館
National Archives of Japan

火薬ヲ巣中ニ注キ玉ヲ紙ヨリ放シ右ノ手ト左ノ親指ト次
指二本ヲ以テ玉ヲ放解シ尖部ヲ上ニシテ巣中ニ籠ノ右ノ親指ヲ
以テ少シク下ヘ送ル而テ親指ト食指ヲ以テ搠杖最端ヲ把ミ
他指ハ閉チル両臂ハ身躰ニ附着スル

五 抜ケ川込矢　一節三挙動

一右ノ手ヲ延シ搠杖ヲ半分抜出シ其侭左ノ親指ヲ以テ撑ヘ而ノ
右ノ手ヲ以テ搠杖ヲ巣口近ク握ル其仕方小指ヲ上方ニナシ爪正
面ニナル様ニスヘシ而ノ親指ハ搠杖ニ沿ヘ延ス
二再ヒ臂ヲ延シ搠杖ヲ管ヨリ抜出シ之ヲ其延伸内ニテ入
三搠杖ヲ轉廻シ其細端ハ左肩ヲ通過シ搠杖頭ヲ弾上ニ置其手

甲ハ正面ニ突ル

六 突ケ川早合

搠杖ヲ右手巣口ニ達スル迄壓入シ而ノ左手ノ拇指ニテ搠杖ヲ撑ヘ右ノ
親指ト食指トヲ以テ搠杖ノ細端ヲ把ム其時手ノ甲ハ正面ニアル如ク
ニ弾ヲ室ニ送ル但シ臂ハ体ニ接ス

七 抜ノ川搠杖　一節三挙動

一搠杖ヲ半分抜出シ之ヲ其侭左ノ手ノ親指ニテ撑ヘ小指ヲ上面ニナシ
テ巣口ノ処ニテ把ミ臂ヲ延シテ搠杖ヲ抜出シ其ヲ巣口ノ延伸内ニ在ラ
シム
二搠抜ヲ轉廻シ其頭ヲシテ左ノ肩ヲ通過セシメ管中ニ納メ右手巣
口ニ觸ル、迄突込　爪ハ正面ニナル様ニス
三右小指ヲ搠杖頭ニ置テ搠杖ヲ納メ其時左ノ手ヲ臂ノ全長ニ延シ

左肩傾カヌ様ニスベシ

八　管附ケ　一節二挙動

一　左手ヲ以テ筒ヲ其拳ニ目ノ高サニアル如ク上ケ右手ヲ以テ銃把ヲ握リ半右向ヲナシ同時ニ右足ヲ左ノ足ト直角ニシ足心ヲ以テ左踵ニ對シ而メ左手ハ下ノ帯迠滑送●ス其ト親指ハ臺ヲ傳ヒテ延シ右ノ臂ハ身躰ニ接シ筒ヲ右脇ニ持来ニ臺尻ヲ右ノ肘ノ下ニシ銃把ヲ身体ニ對シ乳ノ下ニ「インチ」ニ對シ銃身ヲ上トシ銃口ヲ目ノ高サニス

二　右手ノ親指ヲ以テ鶏頭ヲ半機ニ掛ケ諸指ハ鬼墻ト銃把ニ接ス右手ノ拇ヲ以テ雷𦙾ヲ袋ヨリ取リ火門上ニ置キ拇ニテ押ヘ銃把ヲ握ル

九　肩ヘ　筒　一節二挙動

一　筒ヲ右肩ニ致シ左手ヲ以テ押付ケ正面ヲ向キ右ノ踵ヲ左ノ踵ノ側ニ持来右ノ手ヲ以テ上ニ示セル如ク銃ヲ持ツベシ

二　左手ヲ速ニ左ニ垂ル、ナリ

構ヘ　一節三挙動

一　右手ヲ以テ筒ヲ挙ケ左踵ニテ半右向ヲナシ右足ヲ左踵ノ後ニ置キ左ノ手ヲ以テ筒ヲ肩下帯ノ処ニテ握リ之ヲ肩ヨリ放ス

二　両手ヲ以テ筒ヲ下シ銃身ハ上ニアリ左ノ拇ハ臺ニ沿ヒテ延ニ臺尾ハ右ノ前肘ノ下ニナリ銃把ハ右ノ乳ノ下二「インチ」ニ置キ臬口目ノ高サニ對ス左ノ臂躰ニ接シ同時ニ右ノ拇鶏頭ノ上ニカヽル諸指鬼墻ノ下ニテ夫レニ對ス

三　鶏頭ヲ張起シ銃把ヲトリ銃尾ノ位置ヲ動カヌヿナキ様ニス

狙ヒ　一節一挙動

拇ヲ搬軌ニ掛ケ左眼ヲ眇シ狙フヿ「ゲウエール」ニ異ナルナシ
二列ニ組タルトキハ一列兵右ノ臂ヲ稍ヤ高クシ二列ノ兵ノ狙ヒ為ニス
二列兵足ヲ右ヘ出スコト八「インチー」ナリ
号放シ込ノ令アレハ銃ヲ下スト一同ニ足ヲ揃ヘ上ニ説示スル如ク
銃ヲ下シ再装薬スル
号止メ肩ヘ取モ狙ヲ待テト云モ替ルコトナシ 但シ狙ヲ待テノ後肩ヘノ
令アラバ鶏頭ヲ半段下シテ肩ヘスルナリ

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan